

# 経済・金融 フラッシュ

## 鉱工業生産 14年9月 ～2 四半期連続減産も、明るい兆し

経済研究部 経済調査室長 斎藤 太郎

TEL:03-3512-1836 E-mail: tsaito@nli-research.co.jp

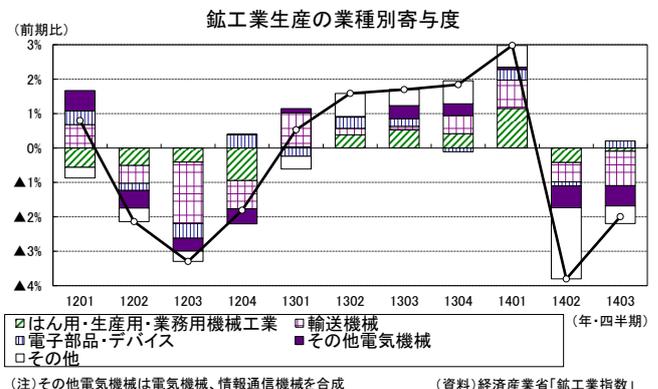
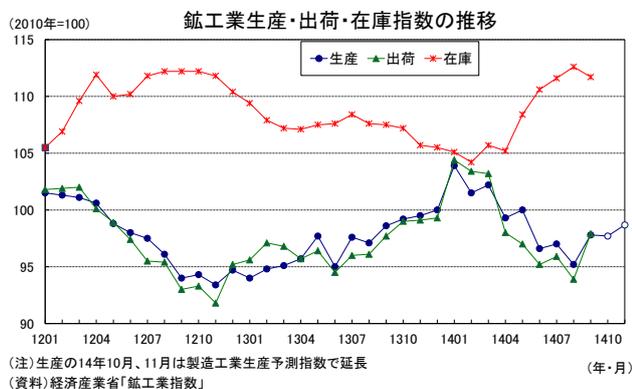
### 1. 9月の生産は8ヵ月ぶりに市場予想を上回る

経済産業省が10月29日に公表した鉱工業指数によると、14年9月の鉱工業生産指数は前月比2.7%と2ヵ月ぶりの上昇となった。先月時点の予測指数の伸び（前月比6.0%）は下回ったが、14年1月以来、8ヵ月ぶりに事前の市場予想（QUICK集計：前月比2.2%、当社予想は同1.2%）を上回った。

出荷指数は前月比4.3%と2ヵ月ぶりの上昇となり、生産の伸びを大きく上回った。この結果、在庫指数は前月比▲0.8%と5ヵ月ぶりに低下した。

9月の生産を業種別に見ると、新型スマートフォン向けの部品の増加などから電子部品・デバイスが前月比5.8%と3ヵ月連続で増加したほか、大幅減産が続いていた輸送機械（前月比4.7%）、情報通信機械（前月比12.4%）が高い伸びとなった。速報段階で公表される15業種中、13業種が前月比で上昇、1業種が低下した（1業種が横這い）。

14年7-9月期の生産は前期比▲1.9%と2四半期連続の減少となったが、4-6月期の同▲3.8%からは減少幅が縮小した。業種別には国内販売、米国向け輸出の低迷が続く輸送機械が前期比▲5.0%となり、4-6月期の同▲2.8%から減少幅が拡大し、情報通信機械は2四半期連続で前期比二桁の大幅減産（4-6月期：前期比▲14.7%→7-9月期：同▲13.4%）となった。一方、設備投資の堅調を反映し、はん用・生産用・業務用機械の減少幅が縮小（4-6月期：前期比▲2.9%→7-9月期：同▲0.6%）し、電子部品・デバイスは前期比2.6%（4-6月期：同▲1.5%）と2四半期ぶりの増産となった。

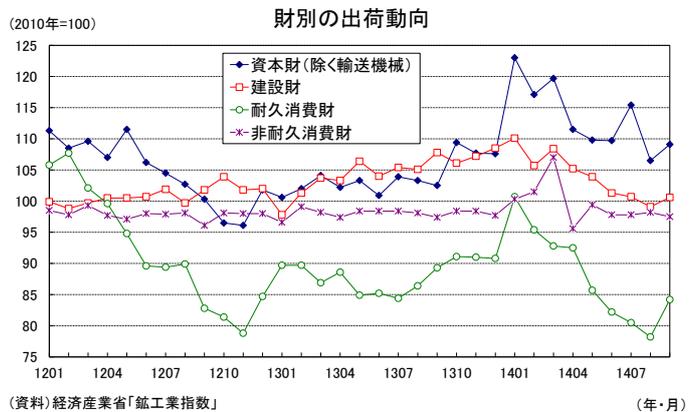


財別の出荷動向を見ると、設備投資のうち機械投資の一致指標である資本財出荷（除く輸送機械）は14年4-6月期の前期比▲8.0%の後、7-9月期は同0.0%となった。また、建設投資の一致指標である建設財出荷は14年4-6月期の前期比▲4.3%の後、7-9月期は同▲3.3%となった。

14年4-6月期のGDP統計の設備投資は1-3月期が前期比7.8%の高い伸びとなった反動もあり、同▲5.1%の減少となった。企業収益の大幅改善を背景とした設備投資の回復基調は崩れておらず、7-9月期の設備投資は増加に転じると予想しているが、それほど高い伸びは期待できないだろう。

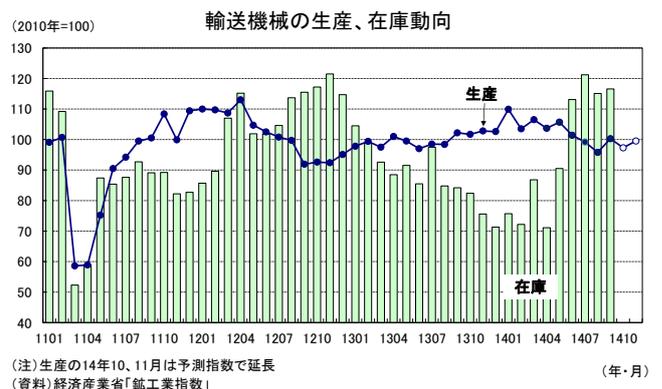
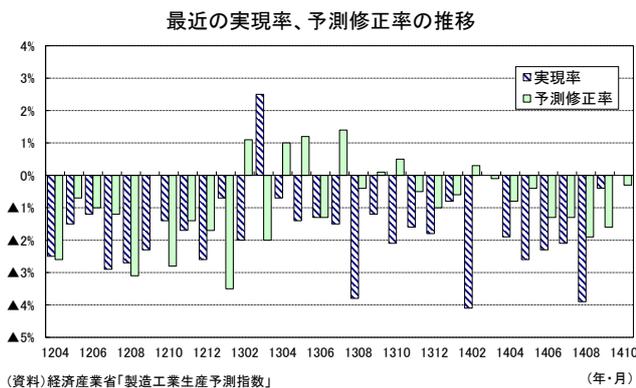
消費財出荷指数は14年4-6月期の前期比▲7.8%の後、7-9月期は同▲3.1%となった。駆け込み需要の反動の影響が続く耐久財が4-6月期の前期比▲9.9%に続き7-9月期も同▲6.7%と落ち込んだ。一方、非耐久財は4-6月期の前期比▲5.2%から7-9月期は同0.2%と持ち直した。

14年4-6月期のGDP統計の個人消費は、駆け込み需要の反動に実質所得低下の影響が加わったことから前期比▲5.1%と大きく落ち込んだ。鉱工業指数以外の消費関連指標は持ち直しの動きを示すものも多いため、7-9月期の個人消費は反動減の影響が和らぐことを主因として増加に転じる可能性が高い。ただし、鉱工業指数の消費財出荷の低迷に加え、ここに来て外出などのサービス消費も低調となっていることから判断すると、伸びは緩やかなものにとどまることが予想される。



## 2. 在庫の積み上がりに歯止めがかかる

製造工業生産予測指数は、14年10月が前月比▲0.1%、11月が同1.0%となった。生産計画の修正状況を示す実現率（9月）、予測修正率（10月）はそれぞれ▲0.4%、▲0.3%となった。生産計画が下方修正される傾向は続いているものの、マイナス幅は大きく縮小した。



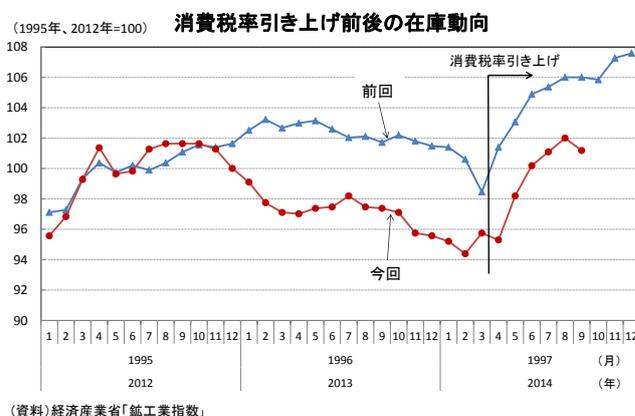
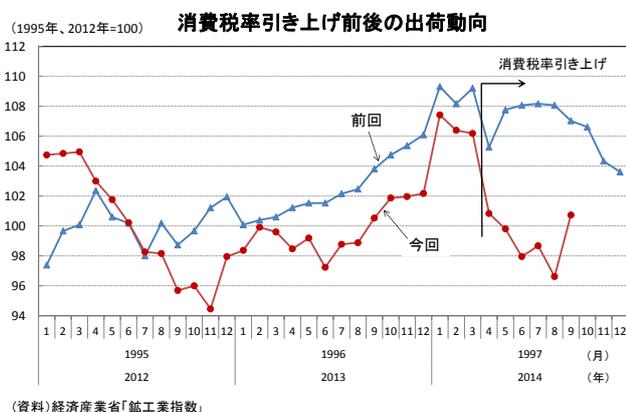
予測指数を業種別に見ると、10月ははん用・生産用・業務用機械（前月比7.5%）、電気機械（前月比7.3%）の高い伸びを情報通信機械（前月比▲5.4%）、輸送機械（同▲3.0%）の減産が打ち消す形で全体では前月比ほぼ横這い、11月ははん用・生産用・業務用機械が前月比▲5.1%と落ち込むものの、それ以外のほとんどの業種が増産計画となっている。他業種への波及が大きく注目され

る輸送機械は9月には3ヵ月ぶりに前月比で増加したが、10月は再び減産計画(11月は前月比2.3%増の計画)となっている。輸送機械の9月の在庫指数は前月比1.3%(前年比では38.5%)と在庫調整が進展していないため、しばらくは一進一退の動きが続くことが予想される。

### 3. 10-12月期は3四半期ぶりの増産へ

鋳工業生産は2四半期連続の減産となったが、生産計画の下方修正幅が大きく縮小したこと、在庫の積み上がり歯止めがかかったことは前向きに捉えることができる。

14年9月の生産指数を10月、11月の予測指数で先延ばし(12月は横ばいと仮定)すると、14年10-12月期は前期比1.7%となる。14年7-9月期は6月速報公表時点で同様の試算を行った際には前期比1.2%のプラスだったが、実績値は前期比▲1.9%と明確なマイナスとなった。在庫調整圧力は残るため力強い回復は当面期待できないものの、当時よりも状況は改善しており10-12月期は3四半期ぶりの増産となることが予想される。



(お願い) 本誌記載のデータは各種の情報源から入手・加工したものであり、その正確性と安全性を保証するものではありません。また、本誌は情報提供が目的であり、記載の意見や予測は、いかなる契約の締結や解約を勧誘するものではありません。